

Y08b 学習投影における博学連携の課題と可能性 — 平塚市博物館を事例として —

石井菜摘（東京学芸大学大学院 教育学研究科），塚田健（平塚市博物館），西浦慎悟（東京学芸大学・理科），君塚仁彦（東京学芸大学・教育・生涯学習）

『プラネタリウムデータブック 2015』（日本プラネタリウム 協議会編）によると、設置目的が「学校教育の補助」であるプラネタリウムは「科学・天文学の普及」に次いで多い。そこで多くのプラネタリウムには「学習投影」という学校の授業としての利用を想定した投影があり、子どもの学習に対する有効性が過去の多くの研究によって明らかにされている（田中，1984，平塚市博物館研究報告「自然と文化」No.7, 117. など）。本研究では特に博物館・プラネタリウムと学校の協働について注目する。片山・坂本（2009，日本科学教育学会研究会研究報告，Vol.29, No1, 59.）において、福岡県内の2館に対する学習投影の現状と課題が報告され、両者の協働の不十分さが指摘されている。

本調査では、日本プラネタリウム協議会に加盟する施設を対象とした学習投影に関するアンケートの実施を通して、大規模な調査を行った。さらに、平塚市博物館を過去に利用したことのある学校教員を対象に同様のアンケート調査を行った。本調査の結果、以下のような点が明らかとなった。(1) プラネタリウムを利用した学習のメリットはプラネタリウムが有する空間的・時間的な自由度の高さや気象条件に左右されない機能的要因であった。(2) そのデメリットはプラネタリウムの立地条件や授業時間の確保の困難さであった。(3) 学習投影の内容に対して学校教員から希望が見えにくい。当日はより詳細な報告を行う。